

ているはずで、うまいものがあるに相違ない。

ビールは何種類か飲んだ。上海、青島、北京、西安の名がついていた。中国ビールは日本のもの比べて苦味がうすいのが一般のようである。北京ビールはライトビールで、清涼飲料といったところだ。青島ビールが一番うまいと思った。しかし、注文しても冷えたビールがこないのには驚いた。どうやらそういう習慣がないようだ。

コーヒーは1度か2度飲んだ。中国の人はほとんど飲まないにちがいない。コーヒーがないと夜の明けない山元団長には同情を禁じえなかった。

お茶はどこにでも用意されている。蓋付き湯呑みに葉を入れ、魔法瓶から熱湯を注ぎ、しばらくして上ずみを飲む。葉が浮いていれば適当に傍に吹き寄せる。魔法瓶は日本のもののような色々な細工はない。大きな木の栓がしてあるだけである。保温能力は日本のものよりよい。

揚州は大明寺で鑑真の話を読みながら、「天下第五の泉」の水で入れた茶を馳走になった。茶をいれる水の番付表をつくったのは、9世紀唐の張又新「煎茶水記」(布目潮風訳注)で、その中で7つの土地の水をあげ、大明寺水を5位にランクしている。「天下第五」の出典はおそらくこれである(蘇州虎丘寺石泉水を第三とするのも同じ)。しかし著者はこれを不十分とし、後半では20の水をあげて別の番付をつくっている。そこでは大明寺水

は12位である(虎丘は5位)。張又新は陰險な政治家だったようだが、この2つの番付表も他人の意見に賛成する形で書いている。とくに後の20傑は「茶経」の陸羽の意見(を書き留めたものを自分は偶々見る機会があった)という念の入れようである。大明寺の丘を愛した歐陽修はよほど腹にすえかねたのか、「大明寺水記」(布目訳注)の中で、この番付表とくに20傑の方に含まれる陸羽の理論との矛盾を衡いて贖物と断定し、そもそも水の番付などナンセンスであるといっている。最後がいいのだが、大明寺の水は揚州の良い水である、陸羽の理論にもちゃんと符合すると結ぶ。巔頂の引き倒しと言えなくもない。「茶経」を読めば確かに彼の言う通りであるが、あんな冗談のような番付表にこだわることもあるまいに、よほど張又新が嫌いだったのだろう。そういえば「新唐書」の編者の一人は欧陽修である。

蘇州虎丘寺の茶店でもお茶を飲んだが、あの水が「天下第三の泉」のものだったかどうかはわからない。紙数も尽きた。

最後に通訳の王茂新さん、蔭でお世話頂いた姚丹蔭さんに心から感謝の意を表します。律義でどこかのんびりした両氏との旅は心和むものでした。さらに、日本気象協会関西本部、海上電機㈱、富士通㈱には多額の援助を頂きました。記して感謝する次第です。

正 誤 表 (訂正し、お詫びいたします)

巻号	頁	行	誤	正
31.8	483	左式(4)	$\tilde{y}'_0 = z_0 H B' + \bar{y}'$	$\tilde{y}'_0 = z_0' H B' + \bar{y}'$
31.11	696	右下17	$Z_s' Z_s = \begin{pmatrix} Z_1 Z_1' & Z_1 Z_2' \\ Z_2 Z_1' & Z_2 Z_2' \end{pmatrix}$	$Z_s Z_s' = \begin{pmatrix} Z_1 Z_1' & Z_1 Z_2' \\ Z_2 Z_1' & Z_2 Z_2' \end{pmatrix}$
31.11	698	右式(19)	$Z_*' Z_* = \begin{pmatrix} Z_a' Z_a & Z_a' z_0 \\ z_0' Z_a & z_0' z_0 \end{pmatrix}$	$Z_* Z_*' = \begin{pmatrix} Z_a Z_a' & Z_a z_0' \\ z_0 Z_a' & z_0 z_0' \end{pmatrix}$
31.11	700	左上7	$\tilde{y}'_0 = x_0' B' + \bar{y}'$	$\tilde{y}'_0 = x_0' B' + \bar{y}'$
32.1	25	右式(7)	$X_0' = u' L$	$x_0' = u' L$